

保湿スキンケアは、日本が生んだ独自の文化

英語圏では、角質水分保持力を、「moisture retention」と翻訳しますが、これはスキンケアにおいて肌が水分を保持する能力「角質水分保持力」(skin's ability to hold on moisture)を説明するのによく使われる表現です。しかし、「moisture retention」は、日本では「保湿」と翻訳します。

つまり、「moisture retention」は英語圏では「角質水分保持力」、日本では「保湿」という捉え方になります。この保湿の捉え方は、日本独特の文化に昇華されました。ちょうど、野球がアメリカではベースボールと呼ばれるのに対して、日本ではベースボールではなく、野球として独自の文化に発展したように。

問題の核心は、日本での「保湿」という概念が、肌本来の水分保持力を示さず、単に水分を補給することとして捉えられている点にあります。

●問題の核心

日本での「保湿」という概念が、肌本来の水分保持力を示さず、単に水分を補給することとして捉えられている点にあります。この概念の取り違えが、スキンケアを日本では『保湿ケア』と捉え、表面的な対策にとどめ、スキンケアの方向性を誤らせています。本来のスキンケアアプローチである『角質水分保持力向上』という深層ケアに向かわせず、誤った方向性である表層ケアに導いてしまう最大の要因となっています。

●スキンケアの目的

本来のスキンケアの目的は『いつまでも健康的で美しい肌でありたい』を実現することで、いかにして角質水分保持力を向上させるかにあります。肌表面を湿らせるだけの日本の保湿スキンケアは、本来のスキンケアの目的から大きく逸脱しています。

●日本がスキンケア大国になった理由

しかし、逸脱することで、日本はスキンケア大国になったのです。